

令和8年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和8年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	3～6学年は目標値を上回ったが、2学年が目標値を1.7ポイント下回る結果となった。特に2学年の「書くこと」や6学年の「理由を明確にして記述する力」に課題がある。低学年からの文作り指導や、高学年での構成を考えた文章表現の指導を継続する。
社会	5学年は目標値を15.7ポイント上回り非常に良好だが、6学年は区平均を3.4ポイント下回った。資料を読み取る力や、複数の資料を関連付けて考える「思考・判断・表現」の力、用語（八方位など）の定着に一部課題が見られる。
算数	3～5学年は目標値を上回ったが、2学年と6学年が目標値を下回った。2学年の「時計・形」、6学年の「分数の計算」など、特定の基礎技能の不足が顕著である。図や言葉を用いた具体的なイメージ化と、数学的根拠に基づいた説明力の育成に重点を置く。
理科	5学年は前年度比12.2ポイント向上し良好だが、4学年と6学年が目標値を下回った。特に顕著な課題として、顕微鏡などの実験器具の操作技能や、理科用語（結露など）の定着、実験結果から論理的に考察する力が挙げられる。
外国語	全体の正答率は目標値を上回った。リスニングによる音声理解は極めて良好である一方、アルファベット（特に小文字の j, b, l, g など）を正確に書く活動に顕著な苦手意識やつまずきが見られる。

本校の教育目標
◎よく考える子
◎体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
・「北区基礎・基本の定着度調査」等の結果を基に個に応じた指導を充実させ、「読み・書き・計算」の習熟と各教科の基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指す。 また、習熟度別指導、学力フォローアップ教室での補充等、組織的な指導体制や指導方法を工夫して更なる学力の向上を図る。 ・発達段階に応じた思考力・判断力・表現力や学びに向かう力を養うとともに、基礎的・基本的な知識・技能を活用した発表や話し合い活動等の言語活動を充実させ、問題を解決する能力の育成を図る。 ・教科等の見方・考え方を働かせた主体的・対話的で深い学びの実現のため、教科等横断的な指導を進めていく。また、授業観察による指導・助言や校内研究・研修の充実を通して授業改善を図る。
校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

学力向上にかかわる経営方針
「学校は勉強をするところ 集団生活（社会性）を学ぶところ」 ・子どもが達成感と満足感を感じ、挑戦しようとする意欲をもつ学校づくりを推進 「確かな学力の定着」 ・少人数習熟度別指導、個に応じた指導・補充学習・家庭学習・校内研究

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・WEBQ－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携 ・算数科少人数習熟度別指導（3～6年）による確かな学力の定着	・北区教育委員会および東京都小学校体育研究会の研究協力校として、体育科の健康課題をテーマとした授業改善と、自ら学び続ける力を仲間とともに身に付けていく授業の研究の推進 ・授業観察を通じた具体的な指導・助言の実施及び、組織的な授業改善 ・サブファミリー内での指導方法の共有 幼小中学校間の交流指導を通じた連携研修及び、義務教育9年間を見通した系統的な授業改善の推進	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月1回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（4年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の平均正答率は、区の目標値（69.2％）を上回っている（75.3％）結果となっているものの、区の平均（76.8％）を下回っている。基礎については区平均（80.5％）とほぼ同等（80.4％）であったが、活用に関しては、区の平均（68.8％）より下回る結果（64.6％）であった。領域別で見ると、「情報の扱い方に関する事項（校内61.7％、区平均68.8％）や「話すこと・聞くこと（校内83％、区平均77.8％）」「漢字を書く（校内69.5％、区平均77.7％）」といった領域に課題が見られる。	学習の中で取り扱った情報の扱い方や内容の読み取る活動を意図的に取り入れる。手に入れた情報を正しく理解し、整理する経験を増やしていく。新出漢字、既習漢字は、文章の中、ワークシートやノートなどで使う習慣を付けさせる。くり返し小テストを行い、4年生までの漢字642字読み書きできるようにする。	社会科や理科など他教科と関連付けながら情報を正しく読み取れるような学習を意図的に増やしていく。漢字の小テストや熟語集めなどを学習タイムに位置付け、年間を通して行う。児童の実態に合わせて3年生までの漢字の復習なども取り入れることで、個々の習熟度に応じた反復学習を行う。
社会	3年生では自分たちの住む北区についてや、学校や家の周りなど自分の生活に近い単元から学習問題を考え、社会の見方や考え方について学習してきた。資料の読み取り方や活用について指導をしてきた。地図の正しい見方や記号、方位のなど、基礎の知識を定着させる工夫も必要である。	教科書にある写真や資料、動画などをもとに、自分たちの今の生活が成り立っている裏側について学ぶ。水が自分たちの生活にくるまでやゴミの最終的な処理などについて学び、それらを社会科見学等で実地で体験させる。水道キャラバンなど実際に体験することで自分事に捉える目を育む。一人一人がもった課題や解決案、学んで思ったことなどをまとめ方を工夫させ、自身の考えをまとめたり整理させる。	調べる前には、「課題の設定」、「情報収集」、「整理・分析」、「表現・まとめ」の探究的なサイクルも活用させていく。ICT機器、きたコン等を活用して学習に対する興味・関心を深めさせる。個別最適化の観点も取り入れ、ポスターや新聞、パワーポイントなど一人一人のまとめたい学び方でまとめることができるようにする。
算数	全体の平均正答率は、区の目標値（71.7％）を上回っている（72.9％）結果となっているものの、区の平均（79.5％）を下回っている。領域別で見ると、「図形（校内59.6％、区平均67.7％）や「たし算・ひき算（校内72.3％、区平均81.3％）」「かけ算（校内64.5％、区平均76.8％）」といった領域に課題が見られる。	「たし算とひき算」「かけ算」について定着を図っていく。九九や四則混合計算などくり返し取り組ませる。大きい数や小数・分数なども既習するので、ICTを活用しながらくり返し、取り組ませる。図形については、実物を使いながら学習することで、より体験的な学びを行う。	問題に対して見通しをもって取り組む力を培う必要性がある。算数少人数教員との連携を密にして習熟度別の学習を充実させる。きたコンを活用し、児童一人一人に合わせた練習問題や発展問題に取り組むことで個々の力を伸ばしていく。
理科	全体の平均正答率は、区の目標値（61.3％）を下回っている（58.9％）結果となっている。領域別だと、どの領域も正答率が区目標よりも下回っているが特に「生命・地球」が下回っている。内容別で見ると、「太陽と地面のようす、（校内43.6％、区平均61.4％）や「じしゃくのせいしつ（校内40.4％、区平均55.5％）」といった領域に課題が見られる。	理科支援員と連携し、児童が実験結果を正しく理解できるように予備実験や事前準備を行う。月や星など実際に学校にいる時間に観察が難しい単元についてはデジタル教材を活用し、児童が理解しやすい環境を整える。	きたコンを活用し、実験の様子や結果を動画や写真に残すことで、児童がいつでも振り返ることができ環境を整える。学んだことが生活の中でどのように生かされているのかについても触れることで児童の興味・関心を高めていく。